
DOG DAYS 機械鎧に宿りし緋色の魂

璃燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOG DAYS 機械鎧に宿りし緋色の魂

【Nコード】

N5046Y

【作者名】

璃燐

【あらすじ】

ある日、幼い少年は事故で両腕両足を失い、両親に捨てられ絶望する。

しかし、其処に犬の耳と尻尾を付けた謎の医者によって、鎧を纏う機械の義腕と義足を取り付けて貰い、再び自分の意思で歩き始める。例え、其処が異界の地が広がる世界に召喚されたとしても……

…

ブログ：失い掛けた希望（前書き）

新作ですwアニメが気に入ったので頑張って書いてみましたw

尚、アニメを見ながら一字一句間違いない様に作業するのはかなり大変です………

ブローグ：失い掛けた希望

それは、突然の事だった。休日は何時も通りに両親と一緒に買い物をしていた時に

起こった……………

トラックが建設中の工事現場に衝突し、鉄筋が次々と地面に落下してきたのだ

幼い日の俺は丁度、次々と落下してくる鉄筋の雨に打たれ周りは土煙で覆われ見えなく

なっていた……………土煙が晴れると周りの人達の悲鳴などが

聞こえて来るも、鉄筋

の山に押し潰された俺は、其処で意識が途絶えた

次に目が覚めたのは、外国にある物凄い設備が置いてある病院のベツトだった。

その時、俺は変な違和感を感じた。そう手を動かそうとしたのに動いた感覚が無いのだ、足もまた然り、ベツトに横たわった俺は何とか、首だけでもと思い動かして見たその光景

は想像を絶するモノだった。俺の身体には両腕、両足が存在してなかったのだ……………

両腕は肩の関節の付け根までゴツソリ無くなり、両足は太腿の付け根のギリギリまで無く

なっていた……………

俺は自分の身体の現状に絶望していた。しかし、まだ其れは終わっていなかった

目を覚ました俺の前に、医者と思わしき中年の男性が扉を開けて入ってきた。其れも

物凄く罪悪感に満ちた表情で、俺にこう告げた

「」両親の傷は殆んど皆無だが、そのご両親は……君を……
捨て……何処かへ
行方を暗ましてしまった……」其れを聴いた瞬間、俺は生きる希望其の物を見失った

……

それから数年後の事だった……

俺の日本人特有の黒髪は、絶望と後悔の連続で真っ白に変色し切っていて日本人かも
判らなくなっていた。何もする事が出来無い日常を過していると、突然病室の扉が開いた
のだ。俺は多少同様しながらもその方向に視線を向ける

其の先には、医者が居た……………そう、確かに医者なのだが、その医者は頭に犬の様な耳と腰の部分には尻尾を取り付けた様な、ふざけた医者が俺の前に来て一言告げた

「自由な手足を、欲しくはないかい？」そう、それだけである。其れだけなのだが俺は思わず「欲しい……………」の一言を口にしたら、医者は微笑みを浮かべこう告げる

「壮絶な苦痛を伴う手術を行うが、其れに見合う程の自由な手足を提供しよう。あ、あと

代金は要らないよ？私が好きでやる事だからね！」

其の後、俺は想像を絶する痛みに耐え抜き、術後の高熱に魘されながらも、見事自由な手足を手に入れた。見た目、機械仕掛けの鎧風の義手と具足を両手両足に着けて貰った
リハビリは、かなり辛かったが、一年後には何とか歩けるまでに至った

歩ける様になってから数日後の事だった。俺に手足をくれた、あの犬耳と尻尾を付けた医者が行方を眩ました……………そして、病室の机の上には指輪と手紙が置かれていた……………

手紙の内容は『何時の日か、この指輪を使う日が来る。必ずその指輪が君の力に成る筈

だろうから、無くさないでくれよ？』

まだ、何のお礼も言っていなかったが、俺は、あの医者を一生尊敬すると決めた……………

だからって医者に成るつもりもないけど

それからまた数日後の事だった。俺は何時もの様にリハビリを兼ねて近くの公園を歩き
ベンチに座っていると、日本人の男性と外人の女性の夫婦が俺の前まで来たのだ

男性の方はイズミと名乗ってきた。恐らく苗字だと思うが、男性は俺に「両親は居るのかい？」と尋ねる。

俺は少し暗い顔をしながら「親に捨てられたから居ない」と答えたと、男性は女性に相談して

数分後、其の二人は俺に「養子に來ないか？」と言われ戸惑う

俺は「こんな機械の様な手足を持っても」と答えたら、行き成り女の人が俺を優しく抱き込んだ。

ああ、母親の温もりってこう言う感じだったのかなと思うと自然と涙が溢れてきて、俺は

その夫婦の養子となった……

その後、義御父さんの故郷、そして俺の故郷でもある、日本に來た（帰ってきた）

其処には、二人の实の息子が居るって言うてた。俺にして見れば義理の兄弟って感じかな？

その子が居る、紀乃川市という所にやってきた

家に着くと、俺は其の男の子（兄か弟で言ったら弟になるのかな）に会った。会って

どうなるかと思ったが、すんなり仲良くなった。因みに名前はシンクって言うらしい

シンクの方は何と俺を兄の様に慕ってきた

俺は、失い欠けた人生と家族を再び手に入れたのだった………

………

………

………

………

第一話：勇者召喚！機械鎧を纏う者 前編（前書き）

ええ、誤字などが無いか色々調べたら、今まで掛かっちゃいましたw
それでは、本編始まります！！

第一話：勇者召喚！機械鎧を纏う者 前編

ピピピピッ！ピピピピッ！と携帯の目覚ましが鳴りその音で、俺は目が覚める

朝の五時………暗い夜空に朝陽が漸く昇る頃に起きて、寝巻きからトレーニング用のジャージに着替え、二階の自室から一階にある居間の窓を開け、義足用に作られた靴を履き日課とも言える、我流の格闘術の鍛錬を始める

「ふっ！はっ！しっ！」空気を切るように拳と足を使いながら、素早い動作で型の稽古をしている。因みに義手及び義足でやっているが、感想を言うならまるで本物の手足の様に自在に動かせる。勿論、機械仕掛けの義具だけに重さも其れなりであるが、数年も鍛錬していれば自然と慣れて、違和感は殆んど感じない

と、鍛錬していると携帯のアラームが鳴る。朝の六時半………そろそろ朝食の準備をするか？シンクも起きて来る頃合だし

朝食は至って簡単だ、ベーコンが入ったスクランブルエッグにトースト、そしてサラダに

スーパなど誰でも出来るお手軽レシピだ。料理を作り終えると同時に二階から降りて来る
足音が聞こえるな？そして、台所の扉を開けると其処には寝癖の着いたシンクが

「あ？おはよう緋兄？毎日早いねえ」ふわぁとまだ眠そうに挨拶してくる

「ああ、おはよう。早く食べようか？」そうして、俺達は席に着いて朝食を取る

シンク Side

「モグムグ……そうだ緋兄？もう準備できてる？」僕の名前はシンク・イズミ

そして目の前で一緒に朝食を取ってるのは、僕の義理の兄弟の暁月あかつき緋ひいろ

年は14歳で僕より一つ年上なんだけど、学年は一緒の中学一年生だ
小さい頃の事故で両手両足を無くしたけど手術のお陰で、ロボット
にも似た機械仕掛け
の義手と義足を使って一緒に生活してる……

「ああ、もう二日前から出来てるぞ？それより、シンク？いい加減に散らかりっ放しの

部屋を、片付けたらどうだ？」と、小言もあるけど、炊事や洗濯など結構できる為、甘えてしまったりする。うーん、なんで僕は料理上達しないんだろうか

……っと、のんびり
食べてるせいで、もう七時半だ！

「モグムグ！……とっ！御馳走様！先に顔洗って来る！」早く着替えないと、またベッキーに、怒鳴どやされちゃうよ！

緋 Side

「さて洗い物済ませば、あっちも丁度終って着替えに行く頃だろうな？」俺は余裕を持って
食器を洗う……案の定、二階に駆け上がって行くシンク。さて、俺も顔を洗うとするか？

ベッキー Side

7時55分……また、出て来ないなあ？しょうがない、今回も叫びますか……

「シンクー！（チリンチリン！）シンクー！起きてる？」自転車のベルを鳴らしながら
シンクを呼び掛ける

「うん！起きてる！！」何時もギリギリに着替えとかするから、遅

刻しそうになるのよ！

「さっさと早く降りてきて〜！遅れそうなら置いてくわよ〜！」「
こう言えば、もう直ぐ
出てくるのよね〜

「ちょ、待って！？直ぐ行くから！！………おはよう、ベッキー」

「おはよう、シンク」ベランダから靴を履き、何時もの様にバックを空中に投げると

「ふっ！………よっと！」其れと同時にベランダからジャンプし、空中で回転しながら
私の真横に着地するシンク

「はい、お見事〜！」シンクは、そんな私の一言に笑顔で笑う

「あれ、シンク？そういえば、緋は？」

「あれ〜？何時もなら僕より早いはずんだけどな〜？」シンクが
そう言うと庭の方から
ジャンプしてくる人が見えた

「はっ！………（ガシャン！）ととっ？洗濯畳むのに時間掛かったけど、間に合ったな………」

おはよう、ベッキー」金属音と共に着地し、私に挨拶を掛けて来る緋………」

小さい時にシンクの両親が養子として迎え、それから仲良くなって、
今じゃ幼馴染ね？

最初会った時はビックリしたわ。機械の手足が付いてたから、本当にロボットだと思った位だしね？

「おはよう、緋！じゃあ行きましょう？」3人揃って学校に向って歩いていく

緋 Side

「そういえば、明日から春休みだけど？シンクと緋は何処に行くの？」

「うーん？父さんと母さん、相変わらず出張から帰って来ないしなあ。僕は、里帰り

でもしよかなって？ね？緋兄？」其処でシンクが俺に話を振ってくる

「まあ、俺は家に居ても暇なだけだし、シンクに便乗して一緒に行く事にしたんだ」

いや、かなり暇だしなあ？家に居て、やる事って言っても鍛錬しかないし……

「里帰り？イギリスの方？」

「そつ！コーンウォールの方、向うは練習できる場所も沢山あるしね！」

「シンクは、相変わらずアスレチックが好きよね？」シンクはガ

ードレールを後ろ向きに

歩き、途切れている場所からバックを上に向けて、バク転し、またガードレールに着地。

どうでも良いけど、歩道歩けよ

「そりやまあゝ、楽しいからね！……今年も七月と九月に大会があるから、ガッツリ

鍛えておかなくちやだし！」

「ああ、確かに在ったな？でも良く覚えてるな？」

「アイアン・アスレチックよね？」そうそう、確かそんな感じの名前だったな？

「そう、七月が予選で、九月が本選」

「二人共、去年は惜しかったもんね？シンクは後一步で優勝できなかった、緋は3位だったし」

「だよねゝ？ベッキーにも応援して貰ったのになあゝ」

「それに俺は、ハンデがあり過ぎるしなあゝ？仕方ないさ」その言葉に二人は一瞬暗い顔をするけど、直ぐに元に戻った

「まあ、二位と三位でも充分凄いと思うけどね？」

「でもやっぱ、今年こそは優勝したい！だから、春休みはレッツ猛練習！」

「俺も、身体を慣らすのに付き合っけど、やっぱり負けたままじゃ男が廃るからな！」

「はいはい……がんばって……」ベッキー、其処で溜め息吐かないでくれよ……

そんなこんなで、話しながら歩いていると校門が見えてくる。ベッキーは自転車を駐輪所に置いてくる

「ああ、そうだ。忘れてた？」ベッキーに何か、言い忘れたみたいだな？

「なに？」

「春休みの最後の四日間、ベッキーのお父さんとお母さん暇？」

「どうかな？なんで？」

「僕等の父さんと母さん戻ってくるから、一緒に和歌山わかやまの別荘に行かないかって？」

「そういえば、義父さんと義母さん、そんな事言ってたっけ？」やべえ、完全に忘れてた……

「あ、本当ー！」

「うん、ナナミも来るんだって」

「良いわね！素敵！」

「ちょっと待て！ナナミも来るって俺、初めて聞いたぞ！？」シンクは、ちゃんと言ったよ？

と苦笑しながら答えた……………言ったか？俺が忘れてるだけか？

「丁度お花見の季節だし、お父さんとお母さん忙しそうならベッキーだけでもって？」

「そっそう？でもやあよ？何時かみたいに、私をほっぽって、アスレチック遊びとか

棒術ごっこ、ばっかりとか……………っ」ちよつと、顔を紅くするベッキーだが、シンクの方を向くと驚いた顔をする。まあ、大体予想つくけど……………

「平気！！前日までにボロボロになるまで特訓しとくから！！」「ベッキーが少しだけ汗を顔に流す。無理も無い……………あそこまで、目をキラキラさせれば誰でもそう思う……………」

「其れに付き合わされる俺の身にも為ってくれよ……………」

「うん？あんまり無茶苦茶しないようにねえ？」小声でベッキーが俺に、ドンマイっと言ってくる……………分かってくれるかあゝベッキー……………」

すると予鈴が鳴る……………俺とシンクはベッキーの前に出て

「それじゃあ、ベッキー！！予定確認しといてねー！」

「まあ、その事を忘れるのはシンクだと思うけどな？」シンクに

聞こえない様、ベッキー

に答えると、少し苦笑しながら

「うん、メールする！」そしてベッキーも俺達の後ろを、追って校舎に入った……

しかし、俺達は気付かなかった……茂みに隠れている何かを……

「シンの奴遅いな？」教室でそんな事を呟いていると、廊下の方から走ってくる

音が聞こえて来る……やっと来たか？

「ごめん！お待たせ！」

「じゃあ、行こうか？」俺達は、窓を開け少し街並みを見ると、窓の隙間沿いを歩きの

玄関上の踊場付近に着いた。俺達はバックを同時に投げ、其処からジャンプする

すると、茂みの方から犬が俺等の着地する場所に、短剣の様な物を地面に突き刺したと思つた次の瞬間。変な光が周り一帯に広がつたと思つたら其処には変な模様の真ん中に穴が開いていた……ヤバイ！どう見ても俺等が落ちるのは確實だ！？

「え！？ええゝ！？」「んなの、有りかよゝ！？」「俺等は成す術も無く、穴に引き擦り込まれ様としている……」

「うええええええええええええ！！？！？！」　「うおおあああああ
あ！？！？！！」俺等は
大声で叫ぶが誰も来る筈も無なかった。序に犬も其の穴に飛び込ん
だ瞬間穴が完全に
閉じてしまった……………

「うわわああああああああああ……」
「バツクと俺等と犬は、
まるで、奈落の底に落ちるかのような様であった……」

.....

.....

.....

.....

Side

今、私はとても長い階段を登っている。私が招いた勇者様が降り立つ場所へと走りながら登っていると、目的地が見えてきた

「ああ！」私はその場所の真上から、降り立つ光の玉が見えると成
功した事と勇者様に
会える喜びで一杯一杯です……………遅れない様に急いで登ります。待
つて下さいね！勇者様！

Side

「うわあああああああ！?! うおおあああ
ああ!?!!

「うう ええ ええ ええ！？！？！？」
「一体何処まで落ちるんだよ
！？もう叫び疲れた」

つつの！？ん？何か見えてきた？大地？もう何でも良いから、降ろしてくれ！？

そして、俺達は地面にぶつかるものの、激しい光で周りが見えない
..... 多少痛い
別段目立った外傷は無いと信じたい！

「いっ……」

「ん？」人の声がする？女の子の声だな？俺達は目を開くと目の前には、桃色の髪をした女の子が居た……………って言うか、犬耳？尻尾！？何が、どうなって

んだ！？

「初めまして、召喚に応えて下さった勇者様方で、いらっしやいますね？」勇者？何言ってるんだ？
あの子は？

「「勇者？」」

「私、勇者様方を召喚させて頂きました、此処ビスコッティ共和国
フィリアンノ領の領主
を勤めさせて居ります。ミルヒオーレ・F・ビスコッティと申します」

第一話：勇者召喚！機械鎧を纏う者 前編（後書き）

とりあえず、前編でしたw台詞に若干誤差？のようなモノの有るか
も知れませんが

どうか、楽しく読んで頂けたら嬉しいですw

あと、質問感想など随時受け付けて居りますのでドシドシ送って
くださいねw

もしかしたら、活動報告等にアンケートなども取るかも知れないの
で見逃さないでねw

第二話：勇者召喚！機械鎧を纏う者 後編（前書き）

漸く更新する事が出来ましたw微調整の為、間違いないか心配していたら

何時の間にか遅くなっていましたw w

それでは、本編お楽しみ下さいw

第二話：勇者召喚！機械鎧を纏う者 後編

「私、勇者様方を召喚させて頂きました、此処ビスコッティ共和国
フィリアンノリオの領主

を勤めさせて居ります。ミルヒオーレ・F・ビスコッティフィリアンノと申します」

「あ、どうも？シンク・イズミと申します」「俺は義理の兄の暁月
緋です」

「勇者・シンク様に勇者・緋様ですよ？存じ上げております！」
え？存じ上げる？

知ってるって意味？なのかな？

すると、犬が上から俺等のバックを啜えながら落ちてきた。後、短
剣も俺の少し手前に

落ちてきた……………もう少しずれてたら、俺の頭に刺さってたな？

犬は、そのままミルヒオーレ……………長いからミルヒで良いか？に駆け
寄ると笑顔でその犬

の名前を言う

「タツマキ！勇者様方の御出迎え大儀でした！！」タツマキって、
えらい名前だな

……………読んで字の如く、竜巻か？つつかしい加減に事情を説明して
欲しいんだが？

「あのうゝ、ええっと？」シンクも何か言いたそうだけど、何言っ
て良いか分からない

見たいだな？

「勇者様方に攔かれましては召喚に応えていただき、此処フロニヤルドに御越し頂きま

して誠にありがとうございます」来たって言うより、連れて来られただけなんだけど？

「私達の話をお聴いていただき、其の上で御力を貸して頂く事は可能でしょうか？」

「ええーつと、とりあえず話を聴かせてくれたら嬉しいです……

…」確かに、具体的には

何の為に呼ばれたのか全然分からん

「右に同じなんだけど？聴かせて貰えるかい？」

「はい。えっ？……いけない！？もう始まっちゃってる！？」ミルヒの後ろから遠く離れた

場所で、花火の様な物が昇る。一体何が始まるか、いい加減に説明してくれ？

「始まってる？」

「我が、ビスコッティは今、隣国と戦をしています！」戦ってまた物騒だな？おい……

すると、遠くから雄叫びの様な声が聞こえると思ったら、ミルヒが走り出そうとしていた

ので、俺等も立ち上がり後を追う事にした

そのまま、階段を下っていくと白くて大きな鳥の様な生き物が、ミ

ルヒを見るや鳴き声を
挙げる……………何かダチヨウっぽい生き物だな？

「御二人共、セルクルを御覧になるのは初めてですか？」

「すみません、地元には居なくって……………」

「似た様な生き物なら、見たこと有るけど？此処まで大きくは無かつたな……………」

「私のセルクル、ハーランです！どうぞ、お乗り下さい！」俺達に手を差し伸べるもの
どうやら、後一人が限界の様だな？

「シンク、お前乗れよ？俺は此れが有るし」俺は義足用に作られた靴の踵を地面に打ち
つけると、電動式ローラーブレードが飛び出してくる。此れバイク並みとまでは行かない
が40〜50km位は加速できる優れ物だ！

「ごめんね？緋兄？」ミルヒの背中に掴まりセルクルに跨るシンク。
俺達は、勢い良く
走り出した……………」

ミルヒはシンクを乗せたハーランで駆けながら、説明をしてくる

「隣国ガレットと我が国ビスコッティは度々戦を行っているのですが、此処の処はずっと

敗戦が続いていて、幾つもの砦と戦場を突破されていて今日の戦
では、私達の城を

落とす勢いです……………」

「ガレット獅子団領国の軍主、『百獣王の騎士』レオンミシエリ様と渡り合える騎士も、

我が国に居なく……………ですから、勇者様方の力を貸して頂きたいんです！」

「あの……………僕等はその、戦士とか勇者じゃ無くて、その辺に居る中学生なんですけど、何か

役に立てる事有るのかな？」

「だよな？其れに俺等見たいなのが戦とかに出ても、足手纏いになるんじゃないか？」

実際、俺等の様な子供に武器持つて戦え、なんて事はできるはずが

……………

「そんな、ご謙遜を！勇者様方の御力は良く存じ上げております」
何回も思っけど、俺等

君に会った事、一度も無い気がするんだけど……………

すると、ハーランは少しだけ飛びブレーキをするみたいに、走るのを止めその先を

見つめる……………その視線の先には空中に浮かぶ大地の上に城の様な建築物が見える……………

またも花火が上がったと思ったら、実況役のアナウンサー見たいな人が何かを実況して

いるようだな？しかも、周りにはまるでアスレチックの様なフィールドまであるな？

何だろう……………戦って言うから、もっと物騒かと思ったけど。良く

見ると大会やイベント
を見てる雰囲気なのは俺の気のせいなのか？…………

三人称 S i d e

『さあ、本日も絶好調で熱い戦が続いております！！実況はガレット獅子団領国より

私、フランボワーズ・シャンデーが。解説にはバナード將軍とレオンミシェリ姫の

お傍役のビオレさんに来て頂いて居ります！』

『どうも』『こんにちは』

『さあ、いよいよガレット獅子団戦士達の進軍が始まって居ります！此処の小砦を僅か

20分で突破して、獅子団戦士が挑むのは！ビスコッティが誇る不落の防壁…………

フィリアンノ・レイクフィールド！歴戦の獅子団戦士達も流石に苦戦していますねえ？』

『ビスコッティ側も此処を抜けられると、後がありませんからね？』

『ビスコッティ側の脱落者救助も相変わらず迅速ですねえ？ビオレさん』

『落ちても諦めずに、何度でも挑戦して欲しいですね』

『総大将のレオンミシェリ閣下はまだ出陣されていませんが、ビスコッティの名の在る

騎士が出て来れば直ぐ様向って叩き落すとの事です！』

『うゝん、頼もしいですね』すると、入り口付近で第二陣が出陣するのを遠目から

観測する栗色の髪をした少女が見ていた

「うわあゝ、此れはちよつとヤバイでありますよ！？」

「ヤバイかのおゝ」「マルティノッジ兄妹はどうしとる？」元老院と呼ばれる老人達が
何やら落ち着かない様子だ

『進軍するガレット戦士団。バトルフィールドでは、ビスコッティの若き騎士

エクレール・マルティノッジが思いっきり、戦士達を追い返しております！』

「ふっ！はっ！」双刀の短剣で、次々と襲い掛かるガレット兵を斬り伏せる。今度は二人

掛かりでエクレールと呼ばれる騎士に攻め込むが、其れを受け止め、後ろに飛び移ると

闘気のような波動が彼女の周りから溢れ出し、その背後に紋章の様なモノが見える

双刀の刃が輝きが増しそれを勢い良く振り斬ると、二つの光刃が大量に押し寄せる

ガレット兵を一掃する……………空から大量の玉の様な形をした猫の様なモノが

降り注ぐ……しかし、全て倒しきれなかったのか、残った兵が彼女の守りを突破する

「しまったっ……兄上!!」突破されたのを少し悔やむものの、彼女が兄と呼ぶ人物に向って叫ぶ。ゲート前に立つ背丈の高い騎士が、槍を携え向かって来るガレット兵に構えを取る……

「ておおおっ!」この男性も先程の彼女と同じ様に、力を溜めると背後に紋章が現れ、槍を真横に勢い良く振るう……爆発で土煙が舞う中、生き残ったガレット兵の一人が猫のようなモノを踏み付け、其れをジャンプ台代わりして高く跳び上がり騎士の真上を抜こうとするも、縦に振り抜いた槍でガレット兵を地面に叩きつける事で突破を阻止する

「ふう……」安心したのか、少々溜め息を吐く

「いやぁ!今のは惜しかったですね!?!」

『最終バトルフィールドに辿り着いた6名にはボーナスポイントが出ますが、惜しかった

一名には特別ボーナスを出して上げたいですね!』

『だそうです!前線の戦士さん!ボーナスだそうですよ!!』

『よかったですね!』ボーナスが出る事に嬉しいのか、猫の様な姿になった兵が声を

上げる

緋 Side

「此れが……………戦？」

「確かに、戦ってるのも見えては居るけど……………ほとんどお祭り感覚だなあ？」

「はい。戦場を御覧になるのは初めてですか？」

「えーっと、この戦で人が死んだり、怪我したりは？」シンクが疑問に思うのも最もだな？
其れを否定するようにミルヒは

「とんでもない！……………戦は大陸全土に敷かれたルールに則って、正々堂々で行う

モノですから、怪我や事故が無いように勤めるのは戦開催者の義務です。勿論、国と国

との一手段では在りますから、熱くなってしまう事も時には有りますが、だけど、

フロニヤルドの戦は、国民が健康的に運動や競争を楽しむ為の行事でも在るんです」

すると、ミルヒはシンクの手を取りこう告げる

「敗戦が続いて、我々ビスコッティの国民や騎士達は寂しい思いをしています……………」

何より、お城まで攻められてしまったと為れば、ずっと頑張って

来た皆はとても

しょんぼりします……………」

「「しょんぼり?」「俺とシンクの声がハモツた

「しょんぼりです……………」ミルヒは俯いて、しょんぼりしている

「うーん……………」シンクは小さい声で何かを考えている

「（異世界の戦……………勇者召喚……………此れって丸つきりベツキーが
ファンタジノベルの

世界だよな……………冷静に考えればこんなの間違い無く夢なんだけ
ど?）えと、姫様?」

「はいっ?」

「僕等はこの国の勇者?」

「はい。私達が見つけて、私がこの方達と決めた……………この国の勇
者様です!」

「だってさ? 緋兄?」

「そうだな」

「うん。じゃあ、姫様の召喚に応じて、皆をしょんぼりさせない様
に! 勇者・シンク
頑張ります!」

「義弟のシンクが頑張るんだ、俺も頑張らない訳には行かないよな

？と言うことで

勇者・緋。頑張るとしますか！」

「ああゝ　ありがとう御座います」思いっきり尻尾振ってるミルヒ：いや、この際だから

俺も姫さんつとでも言おうかね？

「では、急いで城に戻りましょう！装備も武器もみんな用意してありますから！」

タツマキ！ハーラン！」姫さんが、ハーランに近づくと手の甲の部分から光を放つ

紋章の様なモノが現れる

「行きますよ、ハーラン！」紋章の光が増すと、姫さんの言葉に了承したかの様に鳴き声を上げる。光の膜が翼を包むと、大きく翼を広げ今にも飛びそうなハーランを見る…………

あれ？まさか……………此処から飛ぶ気じゃあないよな？シンクと姫さんがハーランに跨ると

犬も乗り込む。なあ、俺はどう行けばいいんだ？

「ちょっと、待て！？俺はどうやって行けば良いんだ？」言ってる傍から、翼をバサバサと

動かし助走の動作を見せる。不味い……………このままでは、本当に置いて行かれる！

俺は、バックの中から、アスレチック用に使うロープを取り出しハーランの足に急いで

巻き付け、助走と共に俺はハーランの足にぶら下りながらも、空を駆ける

「うわお、飛んでる!」「飛びますよ!」ハーランは飛ぶの上手なんです!」

「うおおお!こっちは、凄え怖えぞ!」上から「緋兄、頑張れ!」って聞こえて来る。弟よ!

喜んでるのと心配してる声の違いが丸分かりだぞ!

と、俺はぶら下りの恐怖と戦いながらも前を見ると、双眼鏡らしき物で俺らを見ているのが見える……あれ、そういえば俺、どうやって降りれば良いんだ?

.....

.....

.....

リコッタ Side

「ああ!姫様が勇者様達を連れて帰って来るであります!」でも、もう一人の勇者様は何でハーランにぶら下っているのですか?ああ、乗る場所が無いからありますね?

「でも、どうやって降りるのでありますかね?」

三人称 Side

「今！大変なニュースが入りました！ミルヒオーレ姫がこの決戦に勇者召喚を使用しま

した！此れは凄い、戦場に勇者が現れるのを目にするのは、私も初めてです！！

さあー！ビスコッティの勇者はどんな勇者だ！」

城の中にはメイドと思わしき人たちが、整列している。列の前に居るのメイド長が、皆に指示を出す

「フィリアンノ城メイド隊！勇者様の衣装と武装の準備は万端ですね？」

「「「「はい！」「」「」」」

「よし！勇者様到着後、30秒で着替えを完了させます！」

「「「「了解！！」「」「」」」

緋 Side

「待て待て待て！？せめて俺が、降りれる位の高さから降りた後に着地してくれ！？

って言ってる傍から放すなああああああつあああああ！？」

ハーランは、どうやって

巻き付けたロープを外したかは知らないが、俺は現在、城から周りを
見渡せる広い場所に
向って落下中だ……………そして、ドガアシャン！！と凄まじい金属
音と共に何とか着地
した俺なのだが、体中痺れるように痛い……………いくら義具を着けて
るからってその衝撃が
生身の部分に來ない訳が無いだろう！めちゃくちゃ痛いわ！？

すると、ハーランに乗っている二人が駆け寄ってくる……………

「緋兄、大丈夫！？」「大丈夫ですか！？」

「あえて言おう……………身体が痺れる様に痛い。あとシンク殴らせる」

「何でさ、緋兄！？」

「はうう……………後でハーランに言い聞かせますから」本当だろうか？

「其れでは、此方に着いて来て下さい！装備と武装を用意して有りますので」俺達は

姫さんに着いて行く事にした

ミルヒオーレ Side

「姫様！おかえりなさいであります」私は展望台に向つと、栗色の髪を靡かせ私より少し
背が低い子、リコッタ・エルマールことリコにただいまの挨拶を言

おうと思います

「リコ、ただいまです！」

「勇者様方、来てくれたんでありますね！」

「はい！私達の素敵な勇者様達です！」私はリコからマイクを受け取ると、前に歩き

全体を見渡せる処で宣言する事にしました

「ビスコッティの皆さん、ガレット獅子団領の皆さん！お待ちせしました！近頃敗戦続き

の我等がビスコッティですが、そんな残念展開は今日を限りに御仕舞いです！」

「ビスコッティに希望と勝利を齎してくれる、素敵な勇者様達が来て下さいましたから！」

私は左右の高台に立つ御二人の映像を見つめながら喋り始める

「華麗に鮮烈に、戦場にご登場頂きましょう！」後は、花火が舞う中の、御二人の演技に期待しますから！

緋 Side

「ふっ！」「はっ！」シンクは手に携えてる棒を真上に高く投げつけ後ろ向きにジャンプし

俺自身も、真後ろに向ってジャンプし、派手に地面に着地する……

…シンクは俺に棒を

当てない様に振り回し、俺もシンクに拳と蹴りを当てない様に格好良く決め付ける！

「「姫様からの御呼びに預かり、勇者・シンク！並びに、勇者・緋！只今、見参！！」」

俺達は、二人揃って参加する戦場で高々に声を上げ宣言した……

……

……

……

……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5046y/>

DOG DAYS 機械鎧に宿りし緋色の魂

2011年11月30日16時45分発行